# 翻刻「百人一首抄」（応永十三年奥書）
## 注と索引を付す

吉田　究

### 凡例

○小稿は宮内庁書陵部蔵「百人一首抄」の翻刻・注・索引である。
○翻刻にあたっては
　(イ) 通用の仮名・漢字に改めた。
　(ロ) ミセケチの字は《　》でかこんだ。
　(ハ) 本文右に付された補入の字は（　）で示した。
　(ニ) 衍字は〈　〉でかこんで示した。
　(ホ) 歌番号を付した。
○注を付すにあたっては、応永十三年以前のものを参照することを原則にした。
　引用文献には番号を付し一覧表をかかげた。
○索引は次のように分類した。
　(1) 批評用語索引
　(2) 和歌修辞用語索引
　(3) 人名索引（注釈内容と関連あるもの）
　(4) 引用作品索引（注に作品名を名記せるもの）
　(5) その他（伝受・流派に関するもの）

（1オ）山椋山庄色紙和歌

右百首は京極黄門小倉山庄色紙和歌也それを世に百人一首と号する也これをえらひかきをかるゝ事は新古今集の撰定家卿の心にかなはすそのゆへは歌道はいにしへより世をおさめ民をみちひく教誡のはしたり然は実を根本にして花を枝葉にすへき事なるを此集ひとえに花をもとゝして実をわすれたる集たるにより本意とおほさぬなるへしされは黄門の心あらはれかたき事を口惜おもひ給ふゆへに古今百人の歌をえらひて我山庄にかきをき給ふ（1ウ）物也此撰の大意は実を宗として花をすてしかねたるなりその後後堀川院御時勅を承て新勅撰る彼集の心此百首と相おなしかるへし十分のうち実六七分花三四分たるへきにや古今集は花実相対の集也とそ後撰は実過分にすとかや拾遺は花実相かねたるよしをそ師説申されし能々その一集〳〵の建立を見て時代の風を覚へき事也新古今集をは〈お〉隠（岐）国上皇あらためなをさせ給ひし事は御心にも御後悔の侍るなるへしされは黄門の心はあきらかなる物也抑此百首の人数のうち世（2オ）にいかめしく思ふものそかれ又させる作者ともみえぬもいり待るふしんの事にやたゝし定家卿の心世の人思ふにかはれるなるへし古今の歌よみかすを知らす侍れは世にきこえたる人もるへき事またかひなしそれは世の人の心にゆつりてさしをかれ侍れはしゐておとすにはあらさるへしさて世にそれとも思はぬを入らるゝもその人の名誉あらはるゝ間尤ありかたき事とそ申へからむ此百首黄門の在世には人あまねくしらさりけるそれは世の人の恨おも憚ゆへ也又主の心に随分とおもふ歌ならぬも（2ウ）入へけれはかたく密せゝるにや為家卿の世に人あまねくしる事にはなれるとそ当時も彼色紙のうち少々世にのこりて侍あり此歌は家に口伝する事にて諸義する事は侍らさりけれと大かたのおもむきはかりは諸事になれりしゐては伝受あるへき事也此うちあるは譜代あるは歌のめてたきあるは徳有人の歌入らるゝ也此百首は二條の家の骨目也以此歌俊成定家の心をもさはりしるへきとそ説侍し

（3オ）天智天皇

1　秋の田のかりほの庵の笘をあらみ我か衣手は露にぬれつゝ

かりほの庵とは一説は苅穂の庵一説にはかり庵のいほ也苅穂の時もかりをとよむへきとそ但猶かり庵よろしかるへきにや古の歌はおなしことをかさねよむ事常の儀也さて歌の心は秋の田の庵のその時過て秋も末に成つて笘なとも朽はて露をふせく事もなきまゝ露のたう〳〵とをきあまりたることく我か袖のぬるゝよし也是は王道の御述懐(シュツクハイ)の御歌也此君九州におはします時世をおそれ(3ウ)給てかるかやの関をすへ往徠の人をなのらせとをし給ふし事あるは天子の御身にて御用心の事あるは王道もはや時すきたるかりほの庵にて可覚悟とそ猶たつぬへし此歌は上代の風也上古は心たに能思入れは詞は巨細になきおほかるへし能々よせいをおもふへき事とそ

注(1)『奥義抄』①に「あさくらやきの丸殿に我をればなのりをしつゝゆくはたが子ぞ是は天智天皇の御歌也。よにつゝみ給ふ事有りて、筑前国上座郡あさくらと云ふ所に、山中にくろき屋をつくりて、おはしましけるを木のまろ殿といふ。まろきにてつくれるゆゑ也。用心をし給ひければいりくる人とはぬになのりをしつゝいりける也。」とある。この伝説の混入あるか。『俊頼髄脳』等にも同様の話がある。

2　春過て夏来にけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山

持縵天王(チエン)

右歌春すきて夏来にけらしといへる勿論の事にてよろしからす聞え侍るやうにしらさる人は思ふ(4オ)へきにや此歌は更衣(コウモカヘ)の歌也其故は天のかく山は高山にて春の間は霞ふかふおゝひかくしてそれともみえぬか春過ぬれはかすみも立ちらして夏の空に此山さた〳〵と明白にみゆるを白妙の衣ほすとはいふなりほすは衣のえむ也いかてか明にみゆれはとてしろたへの衣といふそといふ人あり春は霞のころもにおほはれたる山其霞の衣をぬきたるやうなれは白たへの衣とはいへりかすみの衣をもていへる詞也されは春過てといふも夏来にけらしと云もみな用に立て大切の詞也此歌新古今集(4ウ)の夏巻頭に入更衣の歌の故也如比事尤心中にこめて人にあらはすへからすとそ侍し此歌を取て大井川かはらぬゐせきをのれさへ夏来にけりと衣ほすなり(定)家卿此歌はゐせきにかゝる浪を衣といへる此等にて可得其心也

注(2)『拾遺愚草』(上・内裏百首・夏)1221②

3　足引の山とりのをのしたりをのなか〳〵し夜をひとりかもねん

柿本人丸

此歌はことなる儀なとはさらになしたゝ足引(補注1)の山とうち出たるより山とりのをのしたりをといひてなか〳〵し夜といへるさまいか程もかきりなき夜の長さなり(5オ)詞のつゝき妙にして風情尤たけたかしかゝる歌をは眼を付て数返吟してそのあちわひを心見侍るへし無上至極の歌にや侍らん人丸の歌は心を本としたる歌とそ詞景気(ケイキ)をのつからそなはれる事天然の歌仙の徳也古今の間に独歩(トツホ)すといへる此ことはりにや

注(3)「人丸の作は第一其心かぎりなく景気又殊勝也。ことばのつゞきとゝのほり、建立たくみ也。環(たまき)のごとくしてはしなし。」『古今和歌集両度聞書』③

4　たこの浦にうち出て見れは白妙のふしの高嶺に雪はふりつゝ

山辺赤人

此歌は田子の浦の無類(タクイ)をたち出てみれは眺望かきりなくして心詞もをよはぬに冨士のたかね(5ウ)の雪を見たる心の思入て吟味すへし海辺のおもしろきことをも高嶺の雪のたえなる事をも詞にいたすことなく

てその様はかりをいひのへたる事尤奇異なるにこそ赤人の歌をは古今[注(4)]にも歌にあやしくたへなりといへり玄妙の心也猶此雪はふりつゝといへるによせいかきりなし当位即妙の理をおもふへし

注(4)「山辺赤人といふ人あり。歌にあやしく妙なりけり。」『古今和歌集』（仮名序）④

猿丸大夫

5　おく山に紅葉ふみ分なく鹿のこゑきく時そ秋はかなしき

此歌おく山にといへる所尤以肝心也秋ふかく成行（て）はは山（6オ）なとはあらはなる比深山の陰をたのみてしかはある物なり俊恵歌に立[注(5)]田山梢まはらになるまゝに深くも鹿のそよくなるかなといへるにて心得へし惣の心はいかにも秋ふかく成はてゝ太山の紅葉のちりしけるをふみ分て鹿のうちわひ啼比の秋にいたりてかなしき心也此秋は世間の秋也こゑ聞人にかきへるからすされは余情かきりなきにや侍らん此歌いつれの先達の儀にか侍らん[注(6)]月やあらぬほとの歌にこそといはれけるとそ

注(5)『新古今和歌集』（巻第五・秋下）451⑤

注(6)『古今和歌集』（巻第十五・恋歌五）747④

中納言家持（6ウ）

6　鵲のわたせる橋にをく霜のしろきをみれは夜そ更にける

此かさゝきのはしの事七夕にいへる儀には相違せるにやかやうのことはきかねは事外大事きけはあまりやすく心うるにより人の信もあさくなれる事也されはかきあらはし侍らす此歌の心は冬深く成て月もなく雲も晴たる夜霜は天にみちてさえにさえたる深夜なとにおきいてゝ此歌をおもはゝ感情かきりあるへからすとそ

安部仲麿

7　あまの原ふりさけみれは春日なる三笠の山に出し月かも

（7オ）是は仲丸をもろこしへ物ならはしにつかはされけるか帰朝の時めうしうといへる所にて彼国の人別おしみける時月をみてよめるとそふりさけみれはとはふりあふのきて見る儀也但当流には提[注(7)]てといふやうに心得也ふりあふく儀は勿論也されとも此心唐人のなこりおしむ此月は明にすみわたりて天津空もくもりなきころ我朝の三笠山をなかめつゝけたる心万手裏に入たるやうなれはかくいへり暮々此歌は唐人のなこりをも本より天の原をも我か国の事をも能思入て見侍へき事とそたけたかく余情かきりなし

注(7)「此ふりさけと云にあまたの義あり。先ふりあふぎて見る心、又引さげと云儀もあり。提の心なり。ひつさげは手に取ばかりの心也。ふりあふぎ見るを本として、ひつさぐるの儀をば心に持べし。」『古今和歌集両度聞書』③

（7ウ）喜撰法師

8　我か庵は都のたつみしかそ住世を宇治山と人はいふ《覧》（なり）

此歌は大かた明なり宇治山といへともわれは住えたるさまの心也古[注(8)]今にはしめおはりたしかならすといへるは世を宇治と人はいへともとあるへき歌を人はいふなりといへる所をさして云也秋の月を見るに暁の雲にあへるとかける事終夜晴たる月俄に雲のかゝりたるをはしめおはりたしかならすとはいへりしかも此雲かゝりたるさまなをかすかにおもしろき所あり是にて此歌の心を思ふへし

注(8)「宇治山の僧喜撰は、ことばかすかにして、初め終りたしかならず。いはば秋の月を見るに、暁の雲にあへるがごとし。」『古今和歌集』（仮名序）④　これをうけて『両度聞書』③では、「此末の句、人はいへどもとあるべきを、いふ也とよめる所すこし物のたがへるやうなり。始終たしかならぬさまなり。」と云う。

9　花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに

小野小町

春いたり花のさくへき比はかならすたつね見るへき心を思ひ来ぬるにいたつらにたゝ我身世にふるましはりのひまなきにうちすくし〳〵するになか雨さへふりぬれははや花のいろはうつりにけりなといへる也したの心は花の色はと小町か身のさかりのおとろへ行さまをよめり我か身世にふるなかめせし間にとは詠する儀也世にしたかひ人になひき人をうらみ（8ウ）世をかこちなとするにより物なけかしくうち詠しなとしてすくる間に我か身の花なりしかたちはおとろへゆくのこゝろ也人ことに思ふへき身のうへをわするゝ物此ことはり侍へきにこそ

10　これや此行もかへるも別てはしるも知らぬもあふ坂の関

蟬丸

此歌の事書にあふ坂の関に庵室をつくりて住侍りけるにゆきかふ人をみてとあり是や此とはあふ坂の関におち付五文字也おもては旅客の往来のさまの儀明也したの心は会者定離（9オ）の心なりゆくもかへるもるてむの心也関は関をまぬかるゝ儀也万法一如に帰することはりとそ此蟬丸延喜の御子のよしいへる事大に不可然古今集に此人の歌いれり是にてさとるへし盲目といへるは見濁をはなるゝ儀也

注(9)「ある人の云、蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに、此関のあたりを四宮河原と名付けたりといへり。」『東関紀行』⑥という伝説が行われていたが、『東野州聞書』に「蟬丸之事、延喜の御子に非ず。古今の時分までは名なくして、仙人一人有りと人思ひけるなり。卒て後蟬丸と名を付、可レ秘云々。至二後撰一名有り。」と云う。⑦

注(10)「会坂蟬丸　盲目道心者、常不断除、故世人号翁、或云二仙人一。」『和歌色葉』⑧

11　わたの原やそ嶋かけて漕出ぬと人には告よ海士の釣舟

参議篁

是は仁明天王の御時隠岐の国になかされける時に船にのりて出立として京なる人のもとにつかはしける心はわたの原といひ出たるにあはれ深きにや大方（9ウ）の人たに海路の旅はかなしかるへきをまして流人と成てしらぬ波路に漕はなるゝ心は堪かたきさまなり八十嶋かけてとはあらぬさかひへ行を此世の外のやうの心する儀也されは我か思ひの程を海士の釣舟にことつくる也たゝいまわれに対するものはつり舟はかり也心なき物にかく思ふをのふる事作者の本儀にや余情かきりなき物也

注(11)『和歌体十種』⑨では〈余情体・是体詞標一片、義籠万端〉の一首に挙げる。

12　天津風雲のかよひ路吹とちよおとめのすかたしはしとゝめむ

僧正遍照

五節の事は彼袖ふる山の事より出くれはたゝ今（10オ）の舞姫を天乙めに（よ）みなせり心詞たくひなき物也遍照の歌にはかやうなるはまれ

なるにこそ仍定家の心にかなへりとそかならす此舞姫に心をかくるには侍らすたゝ舞の事をほめてかくよめりける也

注(12)『両度聞書』③には「此歌遍照の歌に尤心詞たぐひなしとぞ。」とある。定家の心にかなった事情は、同書に「後島羽院、定家に此六人（注・六歌仙）の事を御尋ねありしに、遍照を挙ゝ之申されき。其時、まことのなからんに、と仰せられしに、定家卿、それを歌とは申侍、と申されけりと云々」と記されている。

13　つくはねの峯より落るみなの川恋そつもりて渕と成ける

陽成院（ヤウゼヤウ）

心はほのかに思そめし事の深き思となるを水かすかなるかつもりて渕と成にたとへいへり惣は序歌也歌の心は是まて也さて君の御歌にておもしろき故侍る也 天子の御心より少の事もおほしめす事 によき（10ウ）は天下の徳也 あしきは天下のうれへと成也 大かたの人も此心を思ふへきにや

14　みちのくのしのふもちすり誰ゆへに乱そめにし我ならなくに

河原左大臣

上の二句はみたるゝの序也惣の心は誰ゆへにみたれ初し君ゆへにこそといへる心也

注(13)『顕注密勘』に「わが心はたれゆへにみだれんぞ、君にこそみだれそめたれ」と解す。『両度聞書』③も同様。

15　君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

光孝天王（クワウコウ）

是は有心体の歌也ある心とはこゝろの残を云也詞のたゝぬ（ママ）と云歌にはかはるへし能々分別すへし心は（11オ）雪はくるしみの方へとる也君を思ふ心さし一にくるしかるへき事をたへしのくよし也此歌のことから能おもふへし

注(14)『東野州聞書』に「此の歌有心体の由被ゝ申侍りし也」とある。但し『両度聞書』には「内に王道もをのづから侍りてこそ有ゝ心体とも申べけれ。是又予が聞く事を、かく直し給へり」とあり、常縁の有心説に宗祗は必ずしも承服しているとは限らない。本注ではむしろ定家の『毎月抄』⑩の秀歌観「上手のわざとこまでと詞をいひさす歌侍るなり。あきらかならずおぼめかしてよむ事、これ已達の手柄にて侍るべし。それをうらやましと思ひて、まなびえぬものから、未練の人のよめるは、何にもつかぬ片腹痛き事にてぞ侍る。」に回帰しようとする注釈態度である。

16　立別いなはの山のみねにおふる松としきかは今帰りこむ

中納言行平

此歌俊成の儀にあまりにくさり過てよろしからす侍るを今かへりこむといひなしたるところ幽玄なりとそ心は明也猶まつ人たにあらはやかて帰りこんと云心也待人もあらしと思ふ心をいへるよし也此歌のことからを能々おもふへし

注(15)『古来風体抄』⑪において、俊成は「このうたあまりにぞくさりゆきたれど、すがたをかしきなり。」とのみ評する。

17　ちはやふる神代もきかす立田川から紅に水くゝるとは

（11ウ）業平朝臣

心は秋の暮又神無月なとに龍田川の流もなきまてちりしける木葉に

水はくれなひ[注16]をくゝりたるさま興を神世にもかゝる事はきかすといへる業平の歌は大略心あまりて詞はたらぬを是は心詞かけたる所なきゆへに入らるゝ也これを以此百首のおもむきをも見侍るへきにそ

注(16)『顕注密勘』③に「水くゝるとは紅の水の葉の下を水のくゝりてながるゝといふ歟。潜字をくゝるとよめり。」とあり、定家は異論を説えていない。有吉保氏蔵『小倉山庄色紙和歌』⑫にも「もみちのかせにふきをとされて、こすゑに一ものこらすしてのち何にちりしきて、そのしたをみつのなかれけるか」とある。『経厚抄』⑬にも「紅葉の下を行水の体をいへはくゝると云専用也」とあるのを参考にすると、ここは「紅を潜る」と訓むべきか。

18　すみの江の岸による波よるさへや夢のかよひ路人めよぐらん

藤原敏行朝臣

(12オ)上二句は序歌也よるさへやといひ侍らんため也心はうつゝの事こそ忍る中は人めをよくるさはりのかなしくもあれ夢にはやすくあはむと思へは夢のうちにも人めをよくるやうの事見ゆれはかくよめるなりうるはしき歌とそ

19　難波かたみしかきあしのふしのまもあはて此世をすくしてよとや

伊勢

此難波かたとは大やうにいひ出たる五もし也五もしに君臣の五もしあり是は君の形なりひしといひつめて詮となるも有能々可分別歌の心は思初しより此かた人にもえむをもとめ詞をもつくし心をもくたき(12ウ)あるはたのめてすくしある(は)又かけもはなれすして年月をかさねぬれはさてもいかゝせむなと思ひあまりたる上にうち歎て云いたしたる歌なりみしかきあしのふしのまもとはいさゝかはかりもと云心也おほかたにかやうの歌をは見侍るへからすそと

20　わひぬれは今はたおなし難波なるみをつくしても
　　あはんとそおもふ

元良親王

是はうたの御門の御時京極宮す所に忍てかよひけるあらはれて後又つかはしたる歌也わひぬれ(は)とはよろつ思のつもりてやるかたなきを云也されは(13オ)いまはあはすとも立にし名はおなし名にこそあれ身をつくしてもなをあはんとそおもふといへりみほつくし難波のえむ也此歌は幽玄体[注17]の歌とそ歌はたゝ心はいふにをよはすうちなかめなとしてよきあしきしらるへきやうを能々吟味すへき事にこそ

注(17)『定家十体』⑭に、この歌を〈幽玄様〉の頭歌として挙げる。『三五記鷺本』⑭にも〈第一・幽玄体〉の頭歌とされている。『慈鎮和尚自歌合(十禅師歟)』⑮において俊成は「もとより詠歌といひて、ただ詠みあげたるにも、打ち詠じたるにも、何となく艶にも幽玄にもきこゆることの有るべし。」とのべたという。

21　いまこむといひしはかりに長月の在明の月を待いてつるかな

素性法師

在明の月を待いつる心一夜の儀にあらすたのめて月月を送行に秋さへ長月の空に成行心を能思入てあちはふへき歌也定家卿[注18]の注にも一夜の事(13ウ)にあらすと侍るにや

注(18)『顕註密勘・定家注』③に「今こむといひし人を月ごろ待程に秋もくれ、月さへ在明に成ぬるとぞよみ侍けん。こよひばかりは猶心づくしならずや」とある。

22　吹からに秋の草木のしほるれはむべ山風をあらしと云覧　文屋康秀

此歌は古今[注19]にもこと葉たくみなるたくひにいへり心は明なり山風をあらしと云に付て文字[注20]の儀を云は当流不用たゝ山風はあらき物なれはあらしといへり吹からにとは別の心なり

注(19)「文屋康秀はことばたくみにて、そのさま身におはず。いはは商人のよき衣着たらむがごとし」『古今和歌集』（仮名序）④但し、作者は『改観抄』に考証する如く、文屋朝康である。

注(20)藤原公任によって「下品上・わずかに一節あるなり」『九名和歌』⑯とされて以来、「文字の儀」のみによる解釈が行われていた。なお『悦目抄』（二条家流・伝基俊著）⑰にも、「梅→木毎」などの例とともに「上下かけあうて侍る」歌とされている。

23　月みれはちゝに物こそかなしけれ我身一の秋にはあらねと　大江千里

大かたの理明也猶月[注21]は陰の気なれはうちなかめても（14オ）心すみあはれすゝむる物也されはちゝに物こそかなしけれといへる下句は我か身も一のやうに覚る心をいはんとて身ひとりの秋にはあらねとゝいへる也長明か我身一[注22]の峯の松風此心也

注(21)「月は陰の気なる故に云々」と『両度聞書』③に見える。

注(22)「ながむればちゞに物思ふ月に又わが身ひとつの峯の松風」『新古今和歌集』（巻四秋上）397⑤

24　此度はぬさもとりあへす手向山紅葉の錦神のまに〳〵　菅家

是は宇田の御門ならへ御幸の時御ともにてよみたまへり此たひは旅の字と云儀ありてその心もたかふへからすといへと度の字能侍るへきとそぬさもとりあへすといふに御幸のさはかしき心こもれりされは（14ウ）山の紅葉をそのまゝに神にまかせて手向る心也君につかふる道よりわたくしをかへりみぬ心也手向山は南都にあり又相坂をもいへるなるへし

25　名にしほはゝあふ坂山のさねかつら人にしられでくるよしもかな　三条大臣

名にしほはゝとは相坂とさねかつらとをかけたることはなりさねかつらは是を引とるにしけみなとにある物なれはいつくよりくるともみえぬ物なれはそのことくおもふ人世にしられすしてくるよしもかなといへる也此歌は詞つよくして更になまみなく侍て一体の歌とみゆ新勅撰なとに此風体の歌おほく入侍り能々（15オ）工夫をめくらすへし

26　をくら山峯のもみち葉心あらは今一たひの御幸またなむ　貞信公

是は亭子院大井河に御幸ありて行幸もありぬへき所也とおほせ給ふに事のよし奏せんと申て此歌をよめり心は行幸のことを申さんはそのおそれあれはもみちにおほせいへる事尤珍重にや歌のさま凡俗をはなれていかめしくきこゆ

27　みかの原わきてなかるゝいつみ川いつみきとてか恋しかるらむ　中納言兼輔[注23]

(15ウ)わきてなかるゝはいつみのえむの字也いつみ川はいつみきといはんため也是も序歌也心はふかくみしやうの人は今はたえはてゝおほえぬはかりなるをなをおもひやます恋わひて我心をせめていへる也又一向あひみる事もなき人を年月へて思ひわひてうち返しいつあひ見しならひにてかくこふるそと我心に云儀そといつれも歌のさまたくひなし

注㉓『改観抄』⑱には「此歌もよみ人しらすなるを、新古今に誤て兼輔の歌とて入られたるを、今はそれによりたまへるなり。」と考証する。

28　山さとは冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは　源宗于朝臣

此歌は先秋のさひしさをよめる也されは秋の暮なとは猶(16オ)木草の色にも玉さかの人めも侍を冬に成ては木葉もおち草も枯行此いとゝ人めたえたるさまを思ふへくそ又云春秋ともにさひしき心を能思つゝけて(み)侍へきともいへり

29　心あてにおらはやおらむ初霜のをきまとはせる白菊のはな　凡河内躬恒

おらはやおらむとはかさねこと葉也いつれもあらまし事也惣の心は白菊のおもしろくさかりなるはたくなふおほゆるに初霜のいたふりたるあしたなとうちなかむれは一しほあはれと思ふよし也霜をも菊をもならへて(16ウ)あひしたる歌なるへし

30　有明のつれなくみえし別より暁はかりうき物はなし　壬生忠峯

此歌はあはすして帰る心をよめり在明はひさしく残る物なれはつれなくといひ侍り此つれなくみゆるは人の事也心は人のもとにゆきて終夜心をつくしていかてあはんと思ふに人はつれなくてはてぬれはいかゝせむと立別ころ有明の月のあはれもふかきをなかめつゝ帰るさまなりたとひあふ夜のかへるさなりともかゝる空はかなしかるへきに結句あはてわかるゝを思ひ(17オ)わひて今夜の暁はかり世にうきことはあらしと思ふよし也古今集にいつれの歌かすくれたると後羽院定家々隆にたつね給ひけるにいつれも此歌を申されたるとそいひつたへ侍る定家卿はこれ程の歌よみて此世の思出にせはやとのたまひしとそ

注㉔『両度聞書』③に「後鳥羽院の御時、古今第一の歌はいづれぞと定家・家隆に御尋有けるに、二人ながら此歌を申されけるとぞ。又定家卿、かやうの歌一首よみ出たらんは此世のおもひ出に侍るべしとの給けるなり。」とある。又、『顕注密勘・定家注』③には「此詞つゞきは、をよばず。えんにをかしくもよみて侍かな。これほどの歌、一よみ出たらん、此世の思出に侍べし。」とのべる。

31　あさほらけ有明の月とみるまてに吉野ゝ里にふれる白雪　坂上是則

此歌は彼地の時の眺望とみ侍るへきなり里にふれるしら雪とはうすき雪に侍るへし有明の月といへるに能かなへり心をつけて見侍るへき也

注㉕「うすき雪」との解は『両度聞書』③に「薄雪の、月にまがふ心、おもしろくや、」とある。

32　山川に風のかけたるしからみはなかれもあえぬもみちなりけり　(17ウ)春道列樹

此歌は志賀の山こえにてよめる歌也心は山川なとに落葉のひまなくふりみたれてなかれもせきかへすはかりなるを興にして風のかけたるしからみそと先いひなしてさて下句にてかくみゆるしからみはなかれもあへぬもみちなりけりとことはれる也なかれもあへぬと云はさらにひまなくおつる木葉をいへる也惣の心はたゝ山と川との眺望なるへし風のかけたるしからみは誠にはしめて云出したる妙處也[注26]

注㉖『両度聞書』③に「風のしがらみと云詞めづらしくつかひたる也。」とある。

33　久かたの光のとけき春の日にしつ心なく花のちる覧　紀友則（18オ）

心は大方風のさそふ花なりともいたうちらんは花のうらみもありぬへきをまして春の日のゆふ〳〵と照して久堅の空も霞わたれる此鳥群木草の色ものとかなるに花のちるをうらみて《賤》（しつ）心なく花のちる覧といへる也此歌工夫すへきとそ師説侍し[注27]

注㉗『両度聞書』③には「風の音せず、はるのひかりものどけき折しも、いそがはしくちる花をうらむる心也。猶観ずべき心あり。」とある。

34　誰をかも知人にせむ高妙の松もむかしの友ならなくに　藤原興風

心は我年老て後古よりさま〳〵になれにし人もある（18ウ）は此世になからへたるもあるは先立てとまらぬもいろ〳〵に成てたゝひとり朋友の心しるもなき時高妙の松こそ古より年たかき物なれとおもへ此松も又昔の友ならねはうちなけきて誰をかも知人にせんと云也下の心は世のすゑのおとろへたるを歎てよめりとある人は皆当時の今めかしきにのみ心をとゝむる折節なれはなり

35　人はいさ心もしらす古郷《の》（は）花そむかしの香ににほひける　紀貫之

事書に初瀬にまうてつることにやとりける人（19オ）の家に久しくやとらて程へて後にいたりけれは彼家のあるしかくさたかになむやとりはあるといひ出し侍りけれはそこにたてりける梅の花をおりてよめりけるかくさたかになとはひさしくをとつれねはたしかにあらぬやとりもそあるらむとうたかひいへる心なり歌の心は明也つらゆきの歌には余情尤おほき歌也此古郷はたゝやとり付たる所をよめる也[注28]

注㉘『近代秀歌』⑲に「むかし貫之、歌の心たくみに、たけおよびがたく、ことばつよくすがたおもしろき様をこのみて、余情妖艶の体をよまず。」とある。『両度聞書』③には「此故郷は久しくなれ来し所」とある。

36　夏の夜はまたよひなから明ぬるを雲のいつくに月やとるらむ　清原深養父（フカヤウフ）

是はたゝ夏の夜のとりあへす明ぬる事を能よめる也（19ウ）心はまたよひそとおもへは明ぬる程に月はいまた半天にもある覧とみれは月も入ぬれはかくよみなせり雲のいつくにとは必雲に用にはなけれとも詞の縁にいへり仍歌のさまめてたきにや

37　しら露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉そちりける　文屋朝康（ヤス）

風の吹しくはしきりの儀也あらき風を云也つらぬきとめぬ玉とは玉

はいとにてつなぬく事ありそれをみたしたるよといへる也惣の歌の心は秋の野の所せはきまてをきみちたる朝の露のおもしろきに(20オ)俄なる風のあら〳〵と吹たるにをもきはかりなる木草の露はら〳〵とちりみたれたる当意をかくよめり能景気を心にふくみ《て》侍るへき歌也

右近

38　わすらるゝ身をは思はすちか《へ》(イ)てし人の命の惜も有かな

是はたゝ人のちゝ[注29]の社を引かけてかはらは命もたえなむとちかへたる人のかはりたる時よめる心は明也但かく契れる人のわすれゆくをうらみすしてなをその人を思ふ心尤あはれにや侍らん

注(29)『大和物語・八四』(20)に「おなじ女、をとこの「わすれじ」とよろづのことをかけてちかひけれど、わすれるのちにいひやりける」としてこの歌が続く。

参議等(ヒトシ)(20ウ)

39　あさちふのを野のしの原忍ふれとあまりてなとか人の恋しき

上は例の序の歌也しのふれとあまりてといへる尤心切なる恋の儀也かやうにやす〳〵ときこえたる歌を能思入事尤その人たるへしあまりてなとかによく心を付へし定家卿のなをさりのを野ゝあさちにをく露も草葉にあまる秋の夕暮此歌をとれる也[注30]

注(30)『拾遺愚草』(下・部類歌・秋)2146(23)

平兼盛

40　しのふれ《は》(と)いろに出けり我恋は物やおもふと人のとふまて

此歌も儀は明也たゝ人のとふまてにも成けるよと打なけきたる心あはれふかきにや

(21オ)壬生忠見

41　恋すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思初しか

此歌もたゝ心はまへにおなし此両首は歌合[注31]のつかひ也おくはすこしまさりけるとそ誠にこと葉つかひ無比類にやまたきはまたはやき也詠歌[注32]一体に前の歌をなをほめいへるなるへし

注(31)『天徳四年内裏歌合』(21)(恋廿番)左に41番歌、右に40番歌が番わされている。なかなか勝負がつかず、「少臣頻候(リニ)天気(ヲ)。未(ダハヌ)給(ヒ)判勅(ヲ)、密詠(ニゼシム)右方歌(ノヲ)。源臣密語言(シラハク)、天気若在(シクハルニ)レ右歟者(レバ)、因(テニニテ)レ之遂以(ヲストリ)レ右為(ヲ)レ勝。有(リ)レ所思(フ)、暫持疑(ラクニフ)也。左歌甚好矣(ダシ)」と歯切れの悪い判詞を残す。

注(32)『詠歌一体』(22)には前の41番歌をあげて「これらは秀歌とて褒美せられたり。」とある。又『三五記鷲本』(14)にも「これらは秀歌とも褒美せられけるとかや。げにもよろしきたぐひなり。」とある。

清原元輔

42　契きなかたみに袖をしぼりつゝすゑの松山波こさしとは

事書に心かはりて侍りける女に人にかはりてとあり心はさてもかくあたにかはる物をたかひに袖をしほりて浪こ(21ウ)さしと契けるよなとすこしはちしむるやうにいへる心也かたみに袖をしほるはたかいにの心也なを心のかはるを中〳〵うらみすしてちきりしをうらむる心也

権中納言敦忠(アツ)

43　あひみての後の心にくらふれはむかしは物をおもはさりけり

人をいまたあひみぬ程はたゝいかにしてか一度の契もとおもふ心一のおもひにてすきぬるをあひみて後はなをその人をあはれと思心もまさり又世の人めもいかゝなと思又はその人の心もいかゝ思ふ覧うつろひやせんとやあらんかくやあらんと思ふ心そへはむかし一すちにあはれいかゝなと(22オ)思ひしは数ならぬ事をかくよめるなりかやうの歌を余にやすくみ侍らんはほいなきことにこそ侍らん[注33]

注(33)『落書露顕』(28)に「是は逢ヶ不遇恋の心なるべし。」とある。

44　あふことのたえてしなくは中〳〵に人をも身をもうらみざらまし

中納言朝忠(トモ)

是もたゝありのまゝ何となくいへはあちわひさらになかるへし此心は人を思ひ初てあはれいかにとおもへとも人はつれなくして年月を過るにからうして玉さかにあへる人の又たえはてゝいとゝやらん方なき思ひのあまりにうち返したえてしなくは中〳〵にといへる也古[注34]の歌あまりにやすくみるは口惜侍なり又やうもあらん(22ウ)とくせ〳〵しくよろつの事をとりそへいへるはことにうたてしく侍也呉々すきを先としてさるへき人にとひたつぬへきにこそ

注(34)ここにこの注釈者の基本的な態度が表明されている。『毎月抄』中の「有心体」の詠作態度とあるいは照応しているかとも思われる。

45　あはれともいふへき人はおもほえで身のいたつらになりぬへきかな

謙徳公(ケントク)

此いふへき人のおもほえてとは公界の他人の事也かくいへるはあはれと思ふへき君は忘れはてぬれは其外に世人に誰かさやうにあらんと(ママ)おもひわひていへる也能々吟味すへしとそわひあひてをはおもほえてといふにたらす侍にや

46　ゆらのとをわたる船人かちをたえ行えもしらぬ恋の道かな

(23オ)曽禰好忠(ソノヨシ)

由良のとは波あらき所なり心は大海をわたる舟梶のなか覧たよりをうしなふへき事也その舟のことく我恋路のたのむ便もなくうかひて行ゑなき心也ゆらのとをなとうちいていふよりたけことからいかめしき歌なり能々可有思慮者也

47　やえむくら茂れるやとのさひしきに人こそみえね秋は来にけり

恵慶法師(エケイ)

事書に河原院にてあれたる宿に秋来ると云心を(23ウ)人々よみけるにと侍り此事書にて心はくもりなく侍れといにしへ此おとゝのさかへし時世の人あふきし事は夢のやうにて昔をわすれぬ秋のみくる心をあはれうちことはりたるさまたくひなくや能々河原院の昔を思ひつゝけて此歌をはみ侍へき也つらゆきかとふ[注35]人もなき宿なれとくる春は八重むくらにもさわらさりけりと云歌にかはる事侍らすむかしはかやうにも読侍るにや今は等類にて侍へし貫之か歌よりはなをそのあはれふかきにや

注(35)『貫之集』(第二)17422『三十六人撰』にも。

48　風をいたみ岩うつ波のをのれのみくたけて物を思ふころかな

源重之(24オ)

心はうこかぬいはほに人の心によそへくたけやすき〈やすき〉波を我身になすらへていへる序歌には侍れと是は心こまやかに侍おもしろくこそ

49　みかきもり衛士のたく火のよるはもえひるは消つゝ物をこそ思へ

大中臣能宣（おほなかとみヨシノブ）

衛士とは大内にて節会なとの時火を焼役人也歌は是も序歌也ひるはきえとは思ひにふしたるさま也むねにみちたる思のせむかたなきをさらはもゆるにもまかせすして人めをつゝむ思けちたる（24ウ）心猶（注㊱）くるしきさまさるやくやよるといひひるといひ思ひのくるしきさまをよく思入てみ侍るへき事にこそ

注㊱古活字本『宗祇抄』には「なをくるしさまさるへくや」とある。

50　君かため惜からさりし命さへなかくもかなとおもひけるかな

藤原義孝

是は後朝なとの歌なるへし一度あふこともあらは命にもかへむと思ひしを引かへていつしかなかくもとよめる心明には侍れとも思ひけるかなと云詞尤見所なり人をおもふ心の切なる様なり我心引返しかくも侍事にといへる所を能見侍るへき事にこそ

51　かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思を

藤原実方朝臣（サネカタ）（25オ）

さしも草は此山によみならはせりもゆる（注㊲）思ひにたとへいへる事也かくとたにえやはいふきとはむねにあまる思ひをえいひやらねはさしも人はいかてかしらんと我か思ひの切なる事のやるかたなきをいひのふる也えやはいふきえもいひかたき也

注㊲『奥義抄』①に「いぶきのたけはつねに火のもゆるなればかくよむなり」とあり、『和歌色葉』⑧ではこれを引用して更に「さしも草は蓬をいふ。又よもぎに似たる草なりともいへり。さしもといはむとてそへてよめる也」と続ける。

52　明ぬれはくるゝ物とはしりながらなをうらめしき朝ほらけかな

藤原道信（ミチノブ）朝臣

是は後朝の恋の心也明ぬれはくるゝ物とは後の夕をもたのむへき事には（侍るを）たゝいまの別の切なる（25ウ）思ひに明ぬれはくるゝとことはりをわすれたる心おもしろくや

53　歎つゝひとりぬる夜のあくるまはいかに久しき物とかはしる

右大将道綱母

事書に入道摂政まかりたりけるに門をそくあけられ（けれ）は立わつらひぬと云入て侍ければよみていたしける心は此事書に明也是又五文字の歎つゝといへる甚深なる詞也能々か様の所をみ侍るへき也其上此歌は当座の頓作にかゝる歌出来の事天然の作者の儀あらはれて侍るにや

54　わすれしの行すゑまてはかたけれは今日をかきりの命ともがな

儀同三司母（26オ）

事書に中関白道隆かかよひ初ける比よめるとあり是も明也なを人の

ことは頼かたけれは一夜を思出にしてきえもうせんといへる心尤切なるさま也能々詞つかひをみ侍へし暮々やさしき歌の体也

大納言公任（トウ）朗詠撰者

55　瀧の音はたえて久しく成ぬれと名こそなかれてなをきこえけれ

是は大覚寺の瀧をよめる歌也此瀧殿はさしもいかめしく作をきしあとの古はてたるをうちなかめて名のみ残さまを思入てよめる歌也下句名こそ流て(26ウ)猶きこえけれといへるうちに人はたゝ名のとまる道を思ふへき心も侍にやおもてはいかにもさら〳〵といひくたして心に観心の侍所能々吟味すへし

和泉式部

56　あらさらむ此世のほかの思出にいま一たひのあふよしもかな

事書にこゝち例ならす侍りける比人につかはしけるとそありけるいのちをもともにと思ふ人をもをきて我身みたり心ちあらむ其思の切なる心を思やりてみ侍へき也尤さもありぬへき心にやあはれふかき歌也一二句ことに無比類こそ

（27オ）紫式部

57　めくりあひてみしやそれとも分ぬまに雲かくれにし夜半の月影

事書にわらはより友たちに侍ける人とし比へて行あひたるかほのかにて七月十日比月にきほひてかへりけれはとあり我友たちを月によそへていへる心は事かきに明也たゝこと葉つかひ凡慮のおよふ所にあらすみえたり月にきほふは月にあらそふ心也

大弐三位（ニ）

58　ありま山ゐなのさゝ原風ふけはいてそよ人をわすれやはする

ことかきに枯々なる男のおほつかなくなと云たりける(27ウ)をよめる歌は序歌也同序なれと上の心もその歌に用に立も侍也是はたゝそよといはんためはかりの序也古歌に如此昔の歌のたけありてきこゆるは序歌の故也そのさかひにいらすしてはかやうの心弁かたき事なるへしさて此歌の心いてとは我心をおこしてつかふこと葉也いて人はことのみそよきいて我を人なとかめそとよみならはせりいてそよ人を忘やはするとは枯々なる思のかへりておほつかなきなといへるを恨て我心をのへいたせる也かくいへるうちに人を忘るゝ物にやと男にあたりていへる心也

（28オ）赤染衛門

59　やすらはてねなまし物をさ夜深てかたふくまてに月をみしかな

此歌は我いもうとにある人のかよひけるかたのめてこさりける時いもうとにかわりてよめる歌也やすらはてとはやかてもねすもしやと侍やすらひぬるを云也惣の心はあた人をまちふけてさりともと思ふに月さへかたふきたらんをみむさまけにいと思ふらるへし

小式部内侍

60　大江山いく野の道のとをけれはまたふみもみぬあまの橋立

事書に和泉式部保昌にくして丹後国に侍りける(28ウ)比都に歌合のありけるに小式部内侍歌よみ侍りけるを中納言定頼つほねのかたにまうて来て歌はいかゝせさせ給らん丹後へ人つかはしけむや使はまうて

こすや心もとなくおほす覧とたはふれたちけるをひきとめてよみける是は小式部か歌のよきは母の和泉式部によませて我歌にするなといふ事の侍りけるを口惜も思ひける比定頼卿かくいへる時よめる歌也此歌よますは兼のうたかひにされはこそともいはるへきにかくよめるにより人のうたかひもはらし我か名誉したる(29オ)ありかたき事にやたとひ又当座によめるともなをさりことはかひなかるへきを既めい歌なれは尤其徳無類こそ侍らめれ大江山いく野みな橋立への道すからの名所也またふみもみすはゆきてもみぬ儀也少文の心もあり事書の使と云事によれる也

伊勢大輔

61　いにしへのならの都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな

一条院の御時奈良のやえ桜を人に奉り侍けるを御前に侍りけれは其花を給て歌よめと仰られけれはよめる歌也心は古郷のさくらの又都の春にあひかたきか(29ウ)けふ君の御覧して二たひ時にあへる心たくひなき心也しかもやえ桜とをきてけふ九重といへる当座のことわさに奇特の粉骨也かやうの事は天生の道と平生のたしなみとのいたす所也道にたつさはらんともからは是を思ふへきにや

清少納言

62　夜をこめて鳥の空音ははかるとも世に相坂の関はゆるさし

事書に大納言行成物語して内の御物忌にこもれるとていそきかへりてつとめて鳥のこゑもよほされてといひけれは夜ふかゝりける鳥のこゑは函(30オ)谷の関の事にやといひつかはしけるはかるとはたはかる心也相坂の関はゆるさしとはあふことをゆるさしとなり惣の歌は明也さて函谷と相坂とをやすらかに一首によみいたすこと是又上手のしわさなり人の歌をみるに我心に一道おもしろきと思ふを心にしめて其外には心をやらぬゆへに古人のいかめしきをもかたはらになす物也されは我云事も道ひろからす侍にや其体に心をめくらして道のたゝすまひを思事とそ承侍りし猶よにあふ坂の関といふは詞の字也古歌に此詞の字おほし

(30ウ)左京大夫道雅

63　いまはたゝ思ひたえなむとはかりを人つてならで云よしもかな

此歌は伊勢の斎宮わたりよりのほりて侍る人に忍てかよひけることを大やけきこしめしてまもりめなと付て侍りけれはしのひにもかよはす成にけれはよみ侍ける歌の心は明に侍れと猶此事書にて一(注38)しほあはれふかく侍にや

注(38)『袋草子』㉔は「大様ニ染ぬる事ニハ宜歌出来者歟。然者道雅三位ハいと歌仙とも不ㇾ聞。斎宮秘通間歌多秀逸也」としてこの歌を挙げ、「此外不ㇾ聞者也。思まゝの事をば陳、自然に秀歌にして有也。是志は有ㇾ中、詞顕ㇾ外之謂歟。」と注す。

権中納言定頼

64　朝ほらけ宇治の川霧たえ〳〵にあらはれわたる瀬々の網代木

此歌は人丸の武士(注39)の八十うち川のあしろ木にいさよふ(31オ)波のゆくえしらすもといへるを取てよめる歌とそ心は宇治は山ふかきわたりにて川上の霧も晴かたき所也あさほらけのおもしろきおりしも詠やりたるにほの〳〵とあらはれつ又かくれつしてあるはなくなきはあらはれたる心眼前の眺望たるにやなを此歌師説(注40)をうくへしおもてはあしろの

興なるへし

注(39)『新古今和歌集』（巻十七・雑中）1648 ⑤・公任『三十六人撰』にも出る。

注(40)平間長雅『百人一首秘訳』㉕になると「有為転変に比してあそはしたる歌也。……人丸明石浦の朝霧にも其心こもれり瀬々の網代木を人界の如くに見たてゝ有るとみれはなし無とみれは又顕れ出るか如く生死輪廻の体此眺望の眼前也といへる歌也」というような「秘説」に展開するが、ここでの「師説」とは本来は、「明石の浦の朝霧」歌（古今和歌集・409）に『両度聞書』⑧が注するごとく「此歌を当流に秘する事は心詞とゝのほりてしかも幽玄にたけたかく、余情あればなり。歌□大切不レ過レ之。専可レ仰レ之とぞ。」に類するものであったろうと考えられる。44番歌の注にも「又やうもあらんとくせ〳〵しくよろつの事をとりそへいへるはことにうたてしく侍也呉々すきを先としてさるへき人にとひたつぬへきにこそ」とある。

65　うらみわひほさぬ袖たに有物を恋に朽なむ名こそ惜しけれ

相模（サガミ）

恋に朽なむ名こそをしけれとはもろともに思程の心ちならは名にたゝむもせめてなるへきをたのみか（31ウ）たき人なとをはかなふ契初てうき名のくちん事を思あまりにほさぬ袖たにある物とはよめり袖はくちやすき物なるにそれさへあるをといへるあはれふかきにや

66　もろともにあはれと思へ山桜花よりほかにしる人もなし

大僧正行尊（タイソウ）

事書に大峯にて思ひかけす桜のさきたりけるをみてよめる大峯に行者入事順逆の峯とて春入を順の峯といひ秋入をは逆の峯といへり当時はたゝ秋のみ入侍にや是は順のみねの時なるへしおもひかけぬ桜と侍るは卯月はかりのことゝみゆ歌の（32オ）心花よりほかに知人もなしとはたゝ今我をは花より外にしる人もなしといひて心に又花をも我より外に知る人あらしと云心こもる也此行尊は古一条院御孫にて円満院の門跡也やことなき人の身をやつし此峯に入てをこなひ給ふおりしもかゝる桜をみ給ひける時のやうを能思入てみ侍るへし惣歌は時のさま所のやう人程にてその心ふかくなる事也能々しりよすへき事也

67　春〈春〉の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそ惜けれ

周防内侍

人に物語して侍けるに周防内侍よりふして枕もかな（32ウ）と云をきゝて大納言忠家是を枕にとてかいなを御簾のうちへさし入て侍りけれは読侍りけるかひなをは手枕にもたせてかいなを立入たると見れはさまあしく侍也此歌かく取あへぬおりふしかゝる歌の出来する事ありかたきにや道綱母（注(41)）のいかに久しきといひ小式部内侍（注(42)）かまたふみもみすとよみ伊勢大輔（注(43)）かけふ九重とよみ此内侍かひなくたゝむといへるはみな時にのそみての詠作也女の身としてかやうに侍こそありかたく侍れ

注(41)53番歌　注(42)60番歌　注(43)61番歌

68　心にもあらて此世にながらへは恋しかるへき夜半の月かな（33オ）

三条院御製

事書に例ならすおはしまして立さらんとせさせおはしましてける比月のあかかりけるを御覧してとあり歌の心は明也御門はれいせん院の第二の御子也御位もわつかに五ケ年にて行末とをくもとおほしめすへ

きをおりゐさせ給はんの御心誠御名残惜くおほしめすへきにこそ其心能々あんして此歌をは見侍へし

69　嵐ふくみ室の山のもみち葉は立田の川の錦なりけり　能因法師

此歌はかくれたる所なしたゝおりふしのけいきと所のさまをよく思あわせて見侍へき也是は誠に上古の(63ウ)正風体なるへしかやうの歌は末代の人やすく思ふへしたゝそのまゝなる所真実の道と可心待とそ

70　さひしさに宿を立出て詠れ《と》(は)いつくもおなし秋の夕暮　良暹法師

心は大かた明也猶いつこもおなし心にあるへし我か宿のたえかたきまてさひしき時思わひていつくにもゆかはやなと云いてゝうちなかむれはいつこも又我心のほかの事は侍らしわれからのさひしさにこそとうちあんしたる心也かやうの事はかくいはすして心にこめて見れはなをかんふかく余情かきりなし定家卿の歌に(34オ)秋よたゝ詠すてゝもいてなまし此里のみの夕とおもはゝと侍れは此歌をとれる心も又おなし猶本の歌かん深かるへしとこそ[注44]

注(44)『拾遺愚草』②(上・歌合百首・建久四年秋・秋夕)832

71　夕ざれは門田の稲葉音信てあしのまろやに秋風そふく　大納言経信

此歌は田家の秋風と云事をよめる芦のまろやはさなから芦はかりにて作を云也其門田のいな葉に夕暮の秋風そよ〳〵とおとするをきゝもあへすやかて芦の丸屋に吹たるさま也夕されは夕暮におなし但すこし風情をもつ心あるや此五文字五句にわたりておかしく(34ウ)侍るへしかやうの所をはいかにもあちはふへきとそ[注45]

注(45)『両度聞書』③317歌注に「夕されは、ただ夕暮程の事にや。夕去と書は万葉に書也。去字の心はなし。私云、夕されはすこし風情を持にや。」とあり、宗祇の「私云…」と本注との関連が注目される。

72　音にきくたかしの浜のあた波はかけじや袖のぬれもこそすれ　祐子内親王家紀伊

此歌は人しれす思ひありその浦風に波のよるこそいはまほしけれと云歌のかへし也あたなみとはあた人と云心なりたかしの浜とはかくれもなくきこえたるあた人と云儀也かけしとは契をかけしと也かゝるあた人に契をかけはかならす物おもひと成へきと云事を袖のぬれもこそすれといへる《歌》也心詞かきりなくいへる哥也よはき所侍らす女の歌にはおもしろくこそ[注46]

注(46)『金葉集』(恋下501)に「中納言俊忠」の歌として見える。

73　〔補注4〕高砂のおのへの桜開にけり外山の霞たゝずもあらなむ　(35オ)権中納言匡房

心は明也たゝ詞つかひさはやかにたけある歌也正風なり但能因か歌よりは少いろへたる所あり[注47]

注(47)能因の69番歌においては、「上古正風体なるへし」と評した。

74　うかりける人をはつ瀬の山おろしはけしかれとはいのらぬ物を　俊頼朝臣

此歌は祈不逢恋と云題をよめり初瀬に恋いのる事は住吉[注49]の物語にみえたり泊瀬は山中にて風はけしき所也惣の心はうかりける人をはけしかれとはいのらぬ物をと云心也泊瀬の山おろしははけしき(35ウ)枕詞也いのれとも人の心ははけしけれはたゝはけしかれといのりたるやうなれはそれをかくはけしかれとはいのらぬ物をといへり定家(卿)の近代秀歌[注49]に此歌を心ふかく詞心にまかせてまなふともいひつゝけかたく誠にをよふましきすかたなりといへり

注(48)『住吉物語』(群書類従本・巻三百十)には「中納言はおもひあまりて。今一たびこの世にてみせ給へとぞいのり給ひける。」・「中将(中納言ト同人)はそれとも思はで。ひとへに神仏の御前に参りても。ひめ君のありどころしらせ給へとぞいのり給けれども。させるしるしもなかりけり。」と「祈不逢恋」の表現は見えるが「初瀬」の名は見えない。

注(49)『近代秀歌』(遺送本)⑲

75　契をきしさせもか露をいのちにてあはれことしの秋もいぬめり　基俊(キ)

事書に僧都光覚唯摩会の講師の請を申けるを度々もれにけれは法性寺入道前大政大臣に恨申けるをしめちか原のと侍ける又の年ももれ(36オ)〈もれ〉にけれはよみてつかはしける心はなをたのめといへるを取て契をきしさせもか露をいのちにてといへる也下句はことしも又もれぬる心の愁也歌のさまなまみなく詞ことに金石のことくなる風体也しかも又あはれふかき歌なるへし

注(50)法性寺入道・藤原忠通が引用した「なほ頼めしめじが原のさせも草われ世の中にあらむ限りは」(『新古今和歌集』(巻第二十・釈教歌)1917に収録)を指す。

法性寺入道前関白大政大臣

76　わたの原こきいてゝみれは久方の雲ゐにまかふ奥津しら浪

海上遠望をよめり心は明也我舟にのりていつる心也歌さまたけありて余情かきりなし眺望なとにかくれたる所はあるましき也たゝ風情を思ふへきにこそ

崇徳院(シュトク)

77　瀬をはやみ岩にせかるゝ滝川のわれても末にあはんとそ思

われてもとはわりなふもと(注51)云心也わかるゝとわりなきとかねたる歌也惣の心は水こそわれてもやかてあふ物なれつらき人の別て後は相かたき心なりけりとおもひ返して身をせめたる歌也あはんとそ思と云うちに此心あり能工夫して余情を思ふへしわれてもとは伊勢物語[注52]にもわりなふもと云心にいへり

注(51)『両度聞書』③1059歌注に「われて思ふ、こなたかなたに成心、又わりなう物思ふ義也。」とある。

注(52)『伊勢物語』㉖(六九段)に「二日といふ夜、おとこわれてあはむといふ。」とあり、『経厚講伊勢物語聞書』㉗にはこの部分「男われてトハワリナクト云心也」と注する。

源兼昌(カネマサ)(37オ)

78　あはちかたかよふ千鳥のなくこゑに幾夜ね覚《を》(ぬ)すまの関守

関路の千鳥をよめり是はすまの浦に旅ねをして彼嶋より千鳥のうちわひてかよひ来るおりから所はすまの浦なれは一しほ旅ねのかなしさのたえかたき心より関守の夜る〳〵のね覚をあはれむ心也尤あはれふ

かき歌なるへし此兼昌は堀川院後百首の作者也されとも此百首に入へき人とははかりかたき事也黄門の心を能あふくへき物也

左京大夫顕輔

79　秋風にたなひく雲のたえまよりもれいつる月の影のさやけさ　（37ウ）

心は明也但此さやけさといへるは清天の月のさやかなるよりはすこし心かはれるあらたにさやかにしておもしろき心侍也いつれもけたかき歌とそ

待賢門院堀川

80　長からむ心もしらすくろかみの乱てけさは物をこそおもへ

是は後朝の歌也ちきりをく人《の》末とをくかはらさらん心もしらす夢斗なるあふことゆへ思ひみたるゝ心をはかなやと思ひわひぬる心也女の歌にてなをあはれふかゝるへし又詞のくさりたくひなくや

後徳大寺左大臣（38オ）

81　郭公なきつる方をなかむれはたゝ有明の月そのこれる

暁郭公を聞と云心也心は待々つる時鳥の一こゑなきて夢とも思ひ分す行ゑなき空をうちなかむれは在明の月ほのかなるさまおもかけ身にしむやうにて侍さま能思入て見侍るへし時鳥の歌はいろ〳〵に心をくたきてしかも心つくしたる所かきりなくこそ

道因法師

82　思わひさても命はある物をうきにたえぬはなみたなりけり

おもひわひとはさりともと思ふ人はつれなく成はてゝきはまり行おもひの心也かゝるおもひには命も消うせ（38ウ）ぬへきをさてもなをいのちはある物をうきことに堪忍せぬは涙なりけりと心をことはりてうちなけく心也

皇大后宮大夫俊成

83　世中に道こそなけれ思ひ入山のおくにも鹿そなくなる

色々世のうさをおもひ取て今はと思入山のおくに鹿の物かなしけにうちなくを聞て山のおくにも世のうき事はありけりと思ひわひて世の中にのかれ行へき道こそなけれとうちなけく心也世に道あらはかゝらんやはとおもひわひぬる儀とそおもひ入は山にいりても又心に先たつにても侍へし

（39オ）藤原清輔朝臣

84　なからへは又此ごろやしのはれんうしとみしよそ今は恋しき

心まことに明也たゝ世の中の人たのむましきゆくゑをたのむ物也此歌を観すへき物にこそ人のため教誡のたよりなるへし歌にはことはりをつめすして心にもたせていへるつねの事也又か様にことはりをせめておもしろきも一体の事なるへし

俊恵法師

85　夜もすから物おもふ比は明やらぬねやのひまさへつれなかりけり

心は明也なをねやのひまさへつれなかりけりといへる詞(39ウ)心めつらしく思の切なる所も見え侍にやうらむましき物をなつかしかりそのおも影にする事恋の道のならひ也能々ねやのひまさへとうちなけきたる所を思ふへき物也

86　歎けとて月やは物を思はするかこちかほなる我なみた哉　西行法師

月の前の恋の心也終夜月にむかひてうちなかむるに物かなしくてたゝ月の心をいたましむるやとうらめしきを思ひ返してかくいへり少平懐の体なり是西行の風骨也さらにつくろふ所なきは上手の(40オ)ものなるへし

87　むら雨の露もまたひぬ槇の葉に霧立のほる秋の夕暮　寂蓮法師

此歌をある人ま木の葉にふれるむら雨のおもしろかりしに又露のをきわたしてたくひなきをまたその興もはてぬに霧たちのほりて色々の風情をつくしたるさまそといへり当流の心はさも侍らす太山の秋の夕のさまにて此歌を見侍るへきとそそのゆへは槇の葉は太山にある物也秋の夕に村雨そゝきてきら〳〵としてま木の葉のしめり(40ウ)たるをりふし霧立のほるさまを能々思へし誠におもしろくもさひしくも又あはれふかゝるへきにや筆舌つくしかたしとそ

88　難波江の芦のかりねの一夜ゆへ身をつくしてや恋渡るへき　(42オ)皇嘉門院別当

是は旅宿にあふ恋の心也心は難波わたりの旅ねはさらてもあはれふかゝるへきを思はすの契にあかぬなこりのかなしさを思わひてあしのかりねの一夜ゆへとをきて身をつくしてやといへるさまゆうなるへし能々所のさま人の名残なとを思入て見侍へきにや

89　玉の緒よ絶なはたえねなからへはしのふる事のよはりもそする　式子内親王

心は忍ふあまり思を出し返し〳〵月日をふるにかくてもなからへは必しのふる事もよはりこそせめと思わひて玉のをよたえなはたえねといへりあらはれはいかなる名もやなとふかくしのふ心也猶々よはりもそする詞おかしくや侍らん

90　見せはやなをしまの海士の袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす　毀富門院大輔

心はをしまの海士の衣はぬれやうの物なれはそれを(42ウ)みよともいはまほしけれとそれもぬるゝ斗にこそあれ我袖は紅涙なれはたゝ我袖をみせはやといへりなをぬれにそぬれしと云詞はめつらしく云出たる物也

91　きり〳〵す鳴や霜夜のさ筵に衣かたしき独かもねむ　後京極摂政大政大臣

ことはりにおゐては明也たゝ蕚《の》(と)云よりひとりかもねむまてこと〳〵く金言のみなり此五句いつれの詞もめつらしくせんとしたる事もなくつゝけやうのめてたきにより詞の字ならぬ蕚さ(42オ)筵も妙

にきこえ侍る也彼山鳥[注53]のをのしたりをと云をとれるにや

注(53)三番歌参照

92　我袖はしほひにみえぬ沖の石の人こそしらねかはくまもなし

二条院讃岐(サンノキ)(42)

寄合恋(ママ)をよめり心は我袖の夜るひるかはく事なく思ふかきり我身の程をさらに思ふ人にしられぬ事をしほひにみえぬおきの石とたとへいたせる也しかも歌様つよくして物にうてぬ所あり此作者当時の女房の中には定家卿執したる歌よみなりとそ[注54]

注(54)『愚秘抄鵜本』㉘には「二条院讃岐…などぞ、女歌にはすぐれておぼえ侍る。此人々の思入りてよめらん歌をば、有家…などもよみぬきがたくや。」とある。

93　世の中はつねにもがもな渚こく海士の小舟の網手かなしも

鎌倉右大臣(カマクラノウ)(42ウ)

此歌は何にたとへむ朝ほらけの歌と浦こく舟のつなてかなしも[注55]二首をとれる心はあとのしら波をとり詞はしほかまのうたをとれり惣の心は世の中は何事も跡のしら波の理《を》そとつねなき世を観しうちなかむるをりふし海士のをふねのおもしろく網手引行をあかすうちみるにやかて引すきてはいつちもしらぬを詠只今目のまへにみゆる物もあとなき事を思ひて世の中はつねにもかもなとよめるにやけに常住あらまほしきことはり也[注56]

注(55)『拾遺集』(巻第二十・哀傷)1327「世中を何にたとへむ朝ぼらけこぎ行くふねのあとのしら波・沙弥満誓」。

注(56)『古今和歌集』(巻第二十・東歌)1088「みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなてかなしも」を引く。

注(57)『顕注密勘』(定家注)③には1088歌に関して「うらこぐふねのなべてかなしもとは、まことに悲歎にはあらず。おもしろしもという様なる詞也。あはれにも、うらがなしくもと侍、叫愚意候。」とあり、『両度聞書』も「網手かなしもは愛する心也」と注する。

94　みよし野の山の秋風さ夜更て古郷さむく衣うつなり

(83オ)参議雅経

是は山のしら雪つもるらし古郷さむく成まさるなりといふ古今の歌をとれる心也心はかくれたる所もなく詞つかひ妙にしてその感侍にやかやうの歌をいかにもあふき信すへきにや侍覧蛬鳴[注58]や霜夜なとやうの詞つかひにおなしかるへきにこそ

注(58)『古今和歌集』④(巻第六・冬歌)325 初句は「みよしのゝ」

注(59)91番歌参照

95　おほけなくうき世の民におほふかな我立杣の墨染の袖

前大僧正慈円(シエン)

うき世の民におほふとは延喜聖代の心を思て一切衆生(43ウ)のうへに法衣をおほふとの給ふ心也おほけなくは卑下の心也民と云字おほくは延喜の心をとる故也心はたゝ衆生の事なるへし和尚の御心十二時中此外はあるへからすとそ

96　花さそふ嵐の庭の雪ならてふり行物は我身なりけり

入道前大政大臣

心はちりはてたる花の雪はいたつらなる物也はや時過て人のいかにとみし花なれと雪となりはてゝはあはれむ人もなくなれるを此雪ををきていたつらにふり行物は我身成けりとよめるにや尤肝心する歌とそ

97　こぬ人をまつほの浦の夕なきに焼やもしほの身もこかれつゝ　（44オ）権中納言定家

来ぬ人を松ほの浦とは昔の事には侍へからすや侍らんなきとをけるは波の風もなき夕なとはしほやく煙もたちそへるを我思のもゆるさま切なるをよそへいへる也松帆の浦に塩焼事は万葉[注60]の長歌にみえ侍り惣の歌はこぬ人を松帆の浦のゆふなきにと云てやくやもしほのといひつゝけ身もこかれつゝ凡俗をはなれたる詞つかひ也黄門の心にわきて此百首にのせらるゝ上は思はかる所に侍らんやしきりに眼を（44ウ）付て其心をさくり知るへきにこそ

注(60)『万葉集』㉙（巻第六・雑歌）935 笠朝臣金村

98　風そよぐならの小川の夕暮は御禊そ夏のしるしなりける　従二位家隆（イカリユウ）

此川にみそきよめるは万葉よりの事なるへし心はならの小川を奈良の葉に取なして川辺の夕暮の更にたゝ秋の心になりはてたる所をいはんとて御禊そ夏のといへる誠にいつもある詞を以めつら敷したてうち吟するにもすゝしくなる心のし侍にや此百首にも新勅撰[注61]にも入られ侍り心およはすともさゆへあらんとは思へしなを詞すかたた（45オ）くひなくこそ

注(61)『新勅撰和歌集』㉚（巻第三・夏歌）192

99　人もをし人もうらめしあちきなく世を思ふゆへに物おもふ身は　後鳥羽院

此御歌は王道をかろしめよこさまの世に成行事をおほしめして御述懐の御歌也人もをし人もうらめしとは世の中人とり〳〵にて世もおさまりかたきをよみたまへるにや又ひとりのうへにても是はよろしと思人《も》（の）又あしき事ある心也よき所は惜く又あしき所はうらめしきをとりあはせてあちきなくと読たまへる也誠世のおさまりかたきは君の御（45ウ）物おもひなるへき事にそ侍らん

100　もゝしきやふるき軒端のしのふ《草》（にも）猶あまりある昔なりけり　順徳院（シユントク）

もゝしきやとうち出たる五文字（は）大かたみ吉野やを泊瀬やなと云にはかはれりよろつの心こもれる也心は王道のすたれゆくをなけきおほしめす儀也すゑの世になれはむかしを忍はならひなるに王道おとろえては一身の御うへならす天下万民のためなれはしのふといふにもなをあまりあるといふ心宣給へる也此御歌と巻頭の御（46オ）歌はいつれも王道の心をよみたまへりその内に上古の風と当世の風とのすかたかとそ侍し

応永拾三仲夏下旬　藤原満基

〔補注1〕枕詞について伝定家著『僻案抄』（群書類従・巻288）は「愚説には、ただ山をばあしびき、空をば久かたとよむばかりにて、凶日来、足を引膝の形などいふことはしらず。」とのべる。

〔補注2〕蟬丸の古今集歌について、『僻案抄』は

「世中はいつれかさしてわかならん行とまるをそ宿と定むる（巻第十八雑歌下・題しらず・よみ人しらず 987）

相坂の嵐の風はさむけれとゆくゑしらねはわひつゝそぬる（同・988）

風の上に在所定めぬ塵の身はゆくゑもしらすなりぬへら也（同・989）

此歌三首は、蟬丸がよめりけるを、古今には作者をあらはさゞりけり。後撰には作者を書るなりとぞ金吾（基俊）申されける。古今さづけられける時のものがたりの内なれば、指事ならねど書二付之一。」とのべる。

〔補注3〕『僻案抄』には「しきりにふく風を、吹しく共、風ぞしくめるともいふ也。」とある。

〔補注4〕『僻案抄』に「高妙、はりまの名所なれど、すべて山をば高さごといふ。…中略…おのへとはおのうへという也。」とあり、この説は『経厚抄』以下に更に詳述されてゆく。

# 付一　批評用語索引

## 凡例

○「百人一首抄」注釈本文より、和歌の批評に関する語を採った。
○活用の終止形・語の基本形で採り、現代かなづかい順に配した。（例・幽玄→ゆうげん）
○複数の語から成るものは、全体からも、部分からも引けるようにした。
○「詞」・「心」の項は中間の助詞を省略した。（例・心はくもりなし→心・くもりなし）
○下欄は「百人一首」の歌番号を示す。（序）は序文を示す。


**あ**
明なり…（序）50 76
あはれ…11 47
あはれ深し…11 30 40 47 56 63 65 75 78 87 88
あちはひなし…44
あちはふへし…71
あふく…78 94
あらたにさはやかなり…79
あらまほしきことはり…93
ありかたし…（序）60 67
あやしく妙…4
ある心…15
**い**
いかめし…26 46 55 62
古の歌…1 44
古の風…100
一体の歌…2 25
一体の事…84
いつもある詞…98
いろへたる所あり…73
**う**
うたのことから…15 16
歌（の）さま…26 27 92
うたてし…44
うるはしき歌…18
**え**
えもいひかたし…51
**お**
おかし…71 89
大かたに見るへからす…19
おほせいふ…26
大やうにいひ出たる五もし…19
おもかけ身にしむ…81
おもしろし…4 8 13 37 48 52 62 64 72 79 84 87 93
おもて…10 55 64
おもひいる…1 4 7 21 39 49 66 76
おもひ切なり…51 56 85 97
おもふへし…1 4 8 13 15 16 28 59 61 76 77 85 87 98
**か**
かきりなし…3 4 5 6 7 11 70 72 76 81
かくれたる所なし…69
花実相対…（序）
かすかにおもしろし…8
歌仙の徳…3
かなし…5 11 18 24 30 78 83 86 88
観心…55
肝心…5 96
観す…85 93
感情限りなし…6
かん侍る…94
かん深し…70
**き**
奇異なり…4
奇特の粉骨…61
教誡…（序）84
吟味すへし…4 20 45 55
**く**
くさり過…16
くさりたくひなし…80
口惜し…（序）44 60
工夫す…33 77
工夫をめくらすへし…21
**け**
景気…3 37 69
けたかし…79
玄妙の心…4
**こ**
心あはれふかし…40
心あまる…17
心おもしろし…52
心・おもふへし…8 13
心かはれる…79
心・くもりなし…47
心こまやかなり…48

心・こめて見る70…
心こもれる…24 66 100
心・さくり知るへし…97
心・しむ…62
心たくひなし…61
心・つく…31 39
心・残(る)…15
心ふかし…66 74
心・ふくみて見る…37
心めつらし…85
心・本とす…3
心・もたせて言ふ…84
心尤あはれなり…38
心・やらぬ…62
心・能思ひ入る…1
心詞かきりなし…72
心詞かけたる所なし…17
心詞たくひなし…12
心詞もをよはぬ…4
ことから…15 16 46
詞・縁…36
詞・おかし…89
詞・くさりたくひなし…80
詞景気…3
詞心にまかす…74
詞心めつらし…85
詞・巨細なし…1
詞ことに金石のことし…75
こと葉たくみなり…22
詞すかたたくひなし…98
詞・たゝす…15
詞・たらす…17
詞つかひさはやかなり…73
詞つかひ妙なり…94
こと葉つかひ無比類…41
詞つかひ凡俗のをよふ所にあらす…57
詞つかひを見るへし…54
詞・つゝき妙…3
詞つよし…25
詞めつらし…90 91
詞尤見所なり…50
ことなる儀なし…3
理(り・る)…3 4 9 10 23 32 52 82 84 91 93
巨細なし…1
こまやかなり…48
さ
さかひに入る…58
作者の本儀…11
さはやかなり…73
さひし…87
さま…3 4 26 27 28 30 36 47 50 66 67 75 76 81 87 88 92
さやかなり…79
し
実…(序)
時の風…(序) 10 34
下の心…9
幹したり…92
辻懐…1 99
上古の正風体…69
上古の風…100
上代の風…1
上手のしわさ…62
上手のもの…86
可有思慮…46
真実の道…69
甚深なる詞…73
信すへし…94 100
す
すかた…74 98 100
すき…44
せ
正風…69 73
正風体…69
切なり…50 51 52 54 85 97
詮となる…19
た
体…54 62 69 81
大切の詞…2
妙…3 4 91 94
たけ…3 7 46 58 73 76
たけあり…58 73 76
たけことからいかめし…46
たけたかし…3 7
たくひなし…4 12 27 29 41 47 56 61 80 98
たとへいふ…13 51 92
たらす…45
ち
珍重…26

つ つくろふ所なし…86
つやかなり…79
つよし…25 92
て 天性の道と平生のたしなみ…61
天然の歌仙の徳…3
天然の作者の儀…53
と 当意…37
当位即妙の理…4
時にのそみての詠作…67
当世の風…100
等類…47
当座…53 60 61
当座の頓作…53
徳…(序) 3 61
な なすらへいへる…48
なまみなし…25 75
は はしめて云出したる妙處…32
はしめおはりたしかならす…8
ひ 筆舌尽し難し…87
一しほあはれ深し…63
ひしといひつめて詮となる…19
ふ 風…(序) 1 13 73 100
風骨…86
風体…25 69 75
深し…11 30 40 47 56 63 65 66 75 78 88
風情…3 71 76 87
粉骨…61
へ 平懐の体…81
ほ 本意…(序) 43
本儀…11
凡俗…26 57 97
凡慮…53
ま まさる…41
末代の人…69
まれなり…12
み 道のたゝすまひ…63
見所なり…50
身にしむ…81
妙處…32
む 無上至極の歌…3
め めい歌…60
めつらし…85 90 98
めてたし…(序) 36 91
も 勿論の事…2 7
ものにうてぬ所あり…92
や やさしき歌の体…54
やすし…6 43 44 69
やすらかなり…62
ゆ 幽玄体…20
幽玄なり…16
ゆうなり…88
よ 用に立つ…2 58
用はなし…36
余情…1 4 5 7 11 35 70 76 77
よそへていふ…57 97
よはき所…72
よみならはせり…51
よろし…1 2 16
よろつの心こもれる…100
を をよふましき姿…74

## 付二 和歌修辞用語索引

え えむ…2 20 27 36
お 同じことをかさねよむ…1
か かけたる詞…25
かさね詞…29
き 金言…91
く 君臣の五文字…19
こ 詞の字…62 91
し 序…14 38 58
序(の)歌…13 18 27 39 48 49 58
な 名所…60
ま 枕詞…74

## 付三 人名索引

(注釈内容と関連をもつ人名)

か 家隆…30
こ 後鳥羽院(隠岐国上皇)…(序) 30
さ 西行…86
し 俊成…(序) 16

た 為家…(序)
て 定家(黄門)…(序) 12 21 30 74 78 92 97

## 付四 引用作品索引

(注に作品名を名記せるもの)

(イ)歌集
万葉集…97 98
古今集…(序) 4 8 10 22 30 94
後撰集…(序)
新古今集…(序) 2
新勅撰集…(序) 25 98
(ロ)歌論
近代秀歌…74
詠歌一体…41
(ハ)物語
伊勢物語…77
住吉の物語…74

## 付五 その他、伝受・流派に関するもの

く 口伝…(序)
し 師説…(序) 33 64
せ 説…(序)
て 伝受…(序)
と 当流…7 22
に 二条家の骨目…(序) 87

## 引用文献一覧


①『奥義抄』（日本歌学大系・巻第一）
②『藤原定家全句集索引』（赤羽淑編）
③『古今和歌集全評釈・古注七種集成』（竹岡正夫編・著）
④『古今和歌集』（奥村恒哉校注）
⑤『新古今和歌集』（国歌大観）
⑥『東関紀行』（群書類従・巻第三百三十一）
⑦『東野州聞書』（日本歌学大系・巻第五）
⑧『色葉和歌』（同・巻第三）
⑨『和歌体十種』（同・巻第一）
⑩『毎月抄』（同・巻第三）
⑪『古来風体抄・初撰本』（同・巻第二）
⑫『小倉山庄色紙和歌』（有吉保氏蔵・新典社刊）
⑬『百人一首抄』（経厚抄）（国立国会図書館蔵）
⑭『定家十体』・『三五記鷺本』（日本歌学大系・巻第四）
⑮『慈鎮和尚自歌合・十禅師歌』（同・巻第二）
⑯『九品和歌』（同・巻第一）
⑰『悦目抄』（同・巻第四）
⑱『百人一首改観抄』（契沖全集第六巻）
⑲『近代秀歌』（日本歌学大系・巻第三）
⑳『大和物語』（古典文学大系）
㉑『天徳四年内裏歌合』（類聚歌合とその研究・堀部正二著）
㉒『詠歌一体』（八雲云口伝・日本歌学大系・巻第三）
㉓『落書露顕』（同・巻第五）
㉔『袋草子』（同・巻第二）
㉕『百人一首秘訣』（大阪府立図書館蔵）
㉖『伊勢物語』（古典文学大系）
㉗『経厚講・伊勢物語』（曼殊院蔵・京都大学国語国文資料叢書五）
㉘『愚秘抄鵜本』（日本歌学大系・巻第四）
㉙『万葉集』（国歌大観）
㉚『新勅撰和歌集』（同）



――昭和五十三年十二月七日　原稿受理――



（よしだきわむ・大阪産業大学教養部）